海外レポート　第39回

コロナ禍における総領事館の現場からinシドニー

中央が筆者

伊原　直樹（いはら　なおき）
前・在シドニー日本国総領事館領事
国土交通省北海道開発局開発監理部職員課開発専門官

1998年北海道開発局入局。国土交通省道路局、人事院北海道事務局、北海道開発局開発監理部開発計画課、人事課などを経て、2021年２月から2024年２月までの３年間、在シドニー日本国総領事館に勤務。2024年２月から現職。

はじめに

私はオーストラリアのニューサウスウェールズ州（NSW州）シドニーに所在する在シドニー日本国総領事館に2021年２月から３年間勤務していました。

シドニー総領事館の管轄区域は主にNSW州と北部準州で、管轄面積は日本の国土面積の約６倍と大変広く、管轄内の在留邦人数は35,000人※1を超えており、世界の都市別の在留邦人数ランキングでもシドニー大都市圏は世界第７位※1、当然取り扱う領事業務の件数も多いのが特徴です。私が所属していた領事班での基本的な業務内容については、前任者の方達が海外レポート第10回と第27回に詳しく報告を残してくれていますので、そちらをご参照いただければ幸いですが、私は記録の意味を込めて、コロナ禍で総領事館の現場では何が起こっていたかに焦点を当てて報告します。

コロナ禍の赴任

2021年２月末、新型コロナウイルスが世界を覆いつくす中、私は閑散とした羽田空港の国際線ターミナルＴ３を出発し、数人しか搭乗していない全日空機にて、シドニー空港に降り立ちました。空港に着くやいなや、同機で到着した人は皆、政府のバスに乗せられ、政府が用意する強制隔離施設のホテルに連行され、14日間の強制隔離（quarantine）が始まりました。バスから初めて見たシドニーの街並み、誰もマスクをしていないことに驚きました。当時の日本は自宅での自主隔離でしたが、豪州はより厳格な強制隔離で、いわば軟禁状態。部屋から出ることすら許されず、廊下にはラグビー選手のようなゴツい体格の警官（軍人？）が常時監視している状況でした。食事は１日３食配膳されますが、当たり外れがあり、ステーキ（当たり）もあれば、得体の知れない料理が出ることも･･･。そんな中、

強制隔離施設から見た領事館が入居するビル

※１　外務省「海外在留邦人数調査統計」令和５年10月１日現在。

前任者からのビールや、以前我が家にホームステイしたシドニー在住の学生（これも何かの縁を感じました）からの果物の差し入れがとても有り難かったです。強制隔離に要する費用は3,000豪ドル（当時のレートで約26万円）、シドニーの物価を考えればホテル代と３食でこれなら安い方ですが、赴任早々ただでさえ財布が寂しい身には痛い出費でした。10日目に部屋で受けたPCR検査が陰性で予定通り14日間で釈放、最終日の夕食時には隔離終了を祝するケーキが出るという粋な計らいがあり、こういうのが海外と実感しました。

隔離終了を祝するケーキ

ロックダウン（外出制限令）

総領事館での業務を開始した３月は、まだPUBで飲み会もできる平和な雰囲気でしたが、５月からデルタ株が急拡大し、６月末からシドニー市内はロックダウンとなりました。しかし、外出制限中でも旅券・証明を求める方や戸籍上の各種届出のため、領事窓口は閉めるわけにはいきません。そこで、職員全員の感染を防ぐため、領事を含めた領事班のスタッフを２班に分け、接触しないよう１日おきに交互に出勤と在宅勤務する形で、窓口業務継続に努めました。その後市内では感染がさらに拡大し、感染者の多い地区の在住者は自身の地区から出てはいけない、など日に日に規制が強化され、出勤できない職員も一人ずつ増えていく中、さらに少ない人数で業務を行うこととなりましたが、皆で協力してなんとか乗り切ることができました。

シドニーの二大名所ハーバーブリッジとオペラハウス

コロナ禍での領事業務

総領事館での領事業務というのは、相手国政府と重要な折衝をするわけでもなく、大きなプロジェクトやイベントを企画するわけでもない、皆さんが海外勤務に思い描く華々しい仕事ではありませんが、在留邦人の援護や旅券・戸籍等の業務は在外公館の最も重要な業務の１つと言え、邦人一人一人に向き合うものです。コロナ禍では陰性証明関係など今までなかった業務や、現地で発表される規制等の情報を日本語に翻訳して在留邦人にお知らせする領事メールの業務量が増えただけでなく、国境が閉じたこと等により、ルールや従来のやり方をただ踏襲するだけでは解決できない問題が表面化する場面が多く発生しました。

新規の旅券申請には戸籍謄本の原本が必要ですが、国際郵便が止まってしまったため、入手には数ヶ月かかります。至急帰国したい、急いで旅券を取得したい方はどうするか。有効期間内の切り替え申請では戸籍謄本は不要なものの、ロックダウンで総領事館に来たくても来ることができず、有効期間を経過してしまう方もいます。遠隔地に居住する方は旅券を更新したくても、コロナ規制で州境や国境が閉鎖され、シドニーに来ることができません。旅券は本人への直接交付が必須なため、代理人に交付するのも高いハードルがあります。従前、豪州人は査証免除措置※2で日本渡航が可能だったものが、水際措置により全外国人に査証が必要となったことで、現地に多く住む豪州と日本の二重国籍者には様々な影響が及びました。現地で永住権を持つ方に対しては、日本への一時帰国はできても豪州に戻って来られないという豪州側の渡航制限もあり、在留邦人にとっては大変不便・不安の毎日だったと思います。そんな中で寄せられる１つ１つの相談に対して、杓子定規（しゃくしじょうぎ）に「ルールなのでできません」と切り捨てるのではなく、困る邦人にどう寄り添い、ルールを守りつつ落としどころをどう見つけるか、それが領事の役割であり、腕の見せどころといえます。

※２　観光や親族訪問を目的とする90日以内の短期滞在は査証の取得を免除する措置で、オーストラリアなど世界71の国･地域（令和６年４月１日現在）に対して実施されている。コロナ禍での水際対策により一時的に停止され、令和４年10月11日に再開された。

水際措置の緩和とその影響

豪州政府は2021年８月、コロナの出口戦略として、ワクチン接種率が何%に達すれば強制隔離をやめます、何％なら国境を開放します、など数値目標を明確にしたロードマップを発表します。シドニーでは３ヶ月以上続いたロックダウンが2021年10月に解除され、ワクチン接種が想定よりも早く進み11月には強制隔離がなくなり、2022年４月はワクチン接種証明があれば国際線搭乗時の陰性証明も不要、その後７月には接種証明も不要となって、豪州国内は徐々に通常の生活に戻っていきました。

一方、日本の水際措置は、2022年３月から、コロナ流行国以外からの入国でワクチン３回接種者は入国時の隔離が不要となり、国内線も乗換可能になったのを端緒に、少しずつ緩和されていくことになりますが、豪州含む世界各国と比べると緩和の時期と内容にギャップがあったため、新たな問題が発生します。

日本行きの便に乗るためには、引き続きPCR検査の陰性証明が必要なところ、一度コロナに罹患（りかん）すると、回復した後でも一定期間は検査で陽性が出続けてしまう、いわゆる「偽陽性」問題が顕在化しました。当時のニュース報道でご存じの方もいるかもしれません。この問題への対応策として、検査結果が陽性であっても、医師の回復診断書をもとに在外公館の領事が書いた「領事レター」を提示すれば、飛行機に搭乗できる仕組みが実施されることになり、後述する査証申請と併せ、そのレターを求める者が殺到することになります。

また、査証免除の一時停止措置は継続しながらも、外国人の査証申請の要件が徐々に緩和されていったため、普段は申請に訪れない豪州人の査証申請者が日に日に増えて、元から申請が必要な国籍者とあわせ総領事館には申請者が殺到しました。来館のオンライン予約は３ヶ月先まで常に一杯、予約が取れない来館希望者からの電話が鳴り止まず、どうしても日本に行きたい申請者からの厳しい要求や罵倒にさらされながら、毎日残業しないと仕事が終わらない。１日100件を超えることもある査証申請を処理しつつ、急ぎで舞い込む領事レターを書く。当時査証免除国に所在する世界中の在外公館の現場では、このように処理能力を大きく超える査証と領事レターの申請が押し寄せパンク状態となっていました。

2022年10月に査証免除の一時停止措置が解除され、入国者数の制限も廃止されたことから、漸く事態は沈静化に向かいます。査証申請はコロナ前の状態に次第に戻り、2023年５月には新型コロナが５類扱いになり、３年以上続いた日本の水際措置は終了しました。

コロナ禍において現地で感じたこと、それは現地政府の判断の速さです。引き締める判断だけでなく、緩和していくスピードも速い。トップダウンではなくボトムアップという業務の進め方やその慎重さは日本人の特徴･美点でもありますが、一方で政策決定のスピードや柔軟性は、特に今回のような有事の際には見習うべきものが多いと感じたのも事実です。

シドニーでの暮らし

シドニーは、多様な人種が暮らし、同性婚も認められ有名なLGBTQのパレードもあるなど多様性社会を肌で感じます。気候は温暖、治安も良い、日本との時差も少なく、車は右ハンドル、チップ文化もないため、日本人には馴染（なじ）みやすいのではないでしょうか。オーストラリア人はフレンドリーで、何でもNo Worriesで済ませる、よく言えば大らか、悪く言えば適当なところも魅力です。現地では日本よりオンライン化が進んでおり、例えばコロナワクチンの接種は、予約から証明書の入手まですべてオンラインで済みましたし、店に入るときには州政府のアプリでQRコードを読み

コロナワクチン接種会場の行列

シドニーCBDにあるセント・メアリー大聖堂

込むことで、同時刻に同施設を訪れた者の中で感染者が出たら通知が来る仕組みや、接種証明もアプリ上で表示できました。飲み会の帰りはアプリでライドシェアを呼び、割り勘も銀行のアプリで即送金です。電話をしなければならない場面でも、三者間通話の形で翻訳してくれる無料サービスがあります。多様な人種がいるからか、そういったサービスが特に充実している印象を受けました。４月のイースターの連休の時期に１週間、シドニー市内の電車、バス、フェリーの公共交通機関がすべて無料ということがありました。一番の稼ぎ時にも関わらず、そういうことができる。日本では絶対にない発想だと感心しましたし、成長を続ける国としての勢いのようなものを感じる場面が他にも多くありました。また、在留邦人が多いことから、様々な業界で日本人が活躍しており、仕事上でも相手方の会社に日本人担当者がいることでコミュニケーション面で助かる場面が多かったです。物価が高いのに加え、ロシアのウクライナ侵攻後に航空賃が高騰、円安が急速に進み手当も目減りするなど、コロナ禍以外の面でもタイミングとしては受難が多い在外生活でしたが、シドニーでのサッカー日本代表のW杯出場決定の瞬間に立ち会えたり、キャンプやウルル旅行など、いい思い出も沢山できました。

北海道との関わり

現在、先人の努力のおかげで、オーストラリアと日本はとても良好な関係を築いています。日本好きな豪州人にとっても、特に冬の北海道は大変魅力的な観光地のようで、毎年、冬を迎える前の10～12月はニセコへのワーキングホリデービザの申請が急増します。オーストラリアにもスキー場はありますが、やはりニセコのパウダースノーは別格とのことです。

2023年５月には、オーストラリアの首都キャンベラとビクトリア州メルボルンの博物館に保管されていたアイヌ民族の遺骨が、現地を訪れた日本のアイヌ民族の関係者に返還されたという歴史的な出来事がありました。私は業務上シドニーを離れられないので、本返還に係る現地での諸調整やアテンドについて、私が懇意にしてもらっていた現地に長く在住し現地事情に精通する方を紹介させていただきました。北海道にとって大事な遺骨返還の実現に、任地において微力ながらも側面支援ができたことを嬉しく感じています。

おわりに

領事として、前例や平常時のルールではNOなものでも、コロナ禍の特殊状況下でもあり、自分の判断で困っている人を救えるのならば、という信念で様々な案件に対峙した３年間でした。離任する際、仕事でとてもお世話になっていた旅行業界の方から、「コロナ中は伊原さんのおかげで多くの日本人が帰国できて救われたと聞いています」というお言葉をいただいたときは、感無量でした。私のこのスタンスにより、急ぎで受ける仕事などが増えてしまった面は否めませんが、嫌な顔一つせず手足となって支えてくれた現地スタッフの皆には感謝しかありません。

在外公館では外務省職員だけでなく、現地在住の職員が多く勤務しており、数年で入れ替わる外交官に対し、むしろ彼らこそが在外公館の現場を支えているといっても過言ではありません。日本の外交は、このような世界中の在外公館で働いている現地在住の方たちの活躍にも支えられているということを知っていただけたら幸いです。

若い頃に海外を旅して回る中で、旅行ではなくいつか海外に住む経験をしてみたいと思っていたので、日本の外交官として海外で働く機会をいただけたのはとても誇りでした。その機会を与えてくれた職場の皆様や、何より、コロナ禍での在外勤務となり多大な心配と負担をかけた家族には心から感謝しています。

世界遺産ウルル（エアーズロック）

シドニー近郊の景勝地ブルーマウンテンの奇岩スリーシスターズ